

# 「出生」をめぐる人間形成論的連関

(教育学教室) 山口 充

## The Educational Relationship between the Newborn and their Parents

Mitsuru YAMAGUCHI

(平成20年6月11日受理)

### はじめに

本稿の主題は、「出生」をめぐる人間形成論的連関について考察することである。この主題を設定した問題意識として、大きく以下の二点がある。

1965年、ユネスコの成人教育推進会議において生涯教育の理念が提唱されて以来、各国で生涯教育あるいは生涯学習の理念の実現のための施策が立案され、実施されてきている。我が国においても生涯学習社会の実現をめざして諸施策が展開されているところである。

ところで元来、生涯教育の理念は、すべての教育を二つの軸、すなわち、水平的・空間的な (horizontal) 軸及び垂直的・時間的な (vertical) 軸において統合 (integrate) することを要請する理念であった。とくに後者の垂直的・時間的統合軸についていえば、生涯の各年齢段階の教育 (乳幼児期・児童期・青年期・成人期の教育) の統合を意図する生涯教育の理念を実現するためには、その基礎的作業として、人間の「生涯の全体」にわたる包括的人間形成論を構築することが必要であろう。本稿は、こうした教育学上ないし人間形成論上の問題意識から、生涯にわたる包括的な人間形成論を構築する一環として、生涯の発端、ライフサイクルの始点に焦点を当て、「出生」をめぐる人間形成論的連関を明らかにすることを意図している<sup>(1)</sup>。

しかしそれにしても、現在、人間の生殖や出産をめぐるさまざまな深刻な問題が生じている。いまや、臓器移植、脳死判定、人工臓器、遺伝子操作、クローニング等の高度医療技術の開発によって人間の誕生も死も、そして病もまた、避けることのできない宿命ではなくなりつつある。生殖や出産に関していえば、体外受精、代理

出産、凍結胚、受精卵診断等を可能にする生殖医療技術の開発によって、生殖と出産をめぐる状況は一変しつつある。すなわち現在、人間存在の絶対的限界としての出生は、死とともに、人為的に操作され、支配され、そして管理される対象となりつつある<sup>(2)</sup>。

ところで、近年児童虐待が大きな社会問題・教育問題となっているが、加えて現在、胎児の安全も脅かされ、子どもの無事な誕生が危うくなっている。避妊法の発達によって墮胎は減少しているが、しかしその一方で、人々の性意識や結婚観の変化によって結婚外の出産が増え、また、貧困などの経済的理由によって、あるいは産科医の不足による医療体制の不備によって、現在、十分な胎児看護・母性看護を受けないままの出産が増加しており、新しい命は、その出発から受難にあっているようにみえる。

さらに今日、子どもの出産をめぐる人々の意識・心性の変化もまた、さまざまな問題を投げかけている。かつては、一家の存続のため、国の繁栄のためといった理由で女性は子どもを産み育てる労苦を一方的・強制的に負わされてきた<sup>(3)</sup>。しかし、現在では、子どもを産む／産まない決定権は、個人、とくに女性にあるとの意識が優勢になっている。もとより、個人、わけても女性の自己決定権を認め、尊重することは、家や国家のために子産みと子育ての道具とされてきた女性を解放するという大きな意味をもっている。しかし、他方、子どもの出産が個人の決定権のもとに置かれるとき、別の重大な問題が生じるように見える。いま問題にしたいのは、生殖や出産の人間存在論的な、そして人間形成論的な「意味」である。生殖と出産に対する管轄が家や国家等の集団から

個人に移ったとしても、生殖と出産を人為的に操作・支配し、管理するという思想そのものは変わらない。言うまでもなく、この思想は、生殖医療技術によって生殖や出産を人為的に操作し、支配しようとする思想と根は同じであろう。

では、「出生」にはいかなる意味があるだろうか。この問いはあまりにも自明なことであるが故に、これまで哲学の領域でも教育学の領域でもほとんど問われてこなかったといってよい。しかし、上記のような生殖と出生をめぐる深刻な諸問題が生じている現在、われわれはあらためて、人間の「出生」の意味を問うことが求められているように思われる。これが、本稿の第二の問題意識である。

筆者はすでに、人間の出生の意味を探るために、「出生」について語った現代における数少ない思想家であるハンナ・アーレントを取り上げ、彼女の出生概念について考察した<sup>(4)</sup>。本稿はこの基礎的研究の発展である。本稿は、これまで取り組んできた、出生に関する人間存在論的検討を基礎にして、「出生」をめぐる人間形成論的連関の考察を意図している。そこで、まず第1節では、必要な限りで、アーレントの出生概念をレビューし、出生の存在論的意味を確認する。次いで第2節では、この確認を踏まえて、出生をめぐる人間形成論的連関を考察する。あらかじめ結論を先取りしていえば、出生をめぐる人間形成論的連関を、妊娠と出産の危機を媒介とする妊婦／母親と胎児／乳児とのあいだの相互応答・相互形成として捉えることができることを論じる。

## 1 「出生」の存在論的意味

### —H. アーレントを手がかりにして

#### (1) 「出生」の三重の意味

アーレントは人間の「出生 (natality)」をどのように捉えているのであろうか。少し長くなるが、重要な一節を引用しよう。「人間は、その誕生によって『始まり』、新参者、創始者となるがゆえに、創始を引き受け、かつ活動へと促される。〈始まりが存在せんがために人間は創造された。それ以前には何者も存在しなかった〉とアウグスティヌスはその政治哲学のなかで言った。この『始まり』は世界の『始まり』と同じものではない。それは、『何か』の『始まり』ではなく、『誰か』の『始

り』であり、『誰か』の始まりそのものである。人間の創造とともに、『始まり』の原理が世界のなかにもちこまれたのである。これは、もちろん、自由の原理が創造されたのは、人間が創造されたときであり、この原理は人間が創造される前にはない、ということを使い換えたにすぎない<sup>(5)</sup>。

ここには、「活動 (action)」, 「始まり (beginning)」, 「創始 (initiative)」, 「自由 (freedom)」, 「唯一性 (uniqueness)」など、アーレントの思想の基盤をなす諸概念ないし諸原理の内的連関が簡潔に描かれているが、いまはこれらの諸原理について言及することはできない<sup>(6)</sup>。ここでは、「出生」概念を確認することに考察を限定しよう。

さて、上の引用からわれわれは、相互に深く関連する「出生」の三重の意味を取り出すことができよう。第一に、出生は一人の人間の「新しい始まり」を意味する。これは、世界にとっても一つの新しい始まりが持ち込まれることを意味する（「始まり」の原理）。しかし、この新しい始まりは、同時に「自ら進んで何かを始める力」をもって生まれてくることを意味し、この力によって一人一人は自ら「創始者」となり（自由の原理・創始の原理<sup>(7)</sup>）、「活動」へと促される（活動の原理）。端的に言えば、第二に、出生は一人の「創始者」が誕生することを意味する。しかも、第三に、出生は、過去には決して存在しなかった（そして、将来にも決して存在しえない）、ある「唯一の存在 (unique being)」が出現することを意味する（唯一性の原理）。

#### (2) 「人間存在の意味」を開示する出来事としての出生

アーレントは自らの「出生」に関する思想を説明するために、しばしば上記の引用文中にあるアウグスティヌスの言葉を援用する。改めて確認しよう。〈始まりが存在せんがために人間は創造された。それ以前には何者も存在しなかった〉<sup>(8)</sup>。ところで、アウグスティヌスのこの一節における「人間」とはアダムを指している。しかし、アーレントはこれを種としての人類ではなく、「個人」として読み替える。そしてその上で、彼女は、「人類」が創造された出来事と「個人」が出生する出来事をパラレルに、あるいは、本質的に同一の事柄として捉える。人間（人類）が創造された理由と個人が出生する理

由とは、本質的に同じである。したがって、人間存在の意味あるいは人間の存在理由は、個人が「出生」する都度、つねに新たに開示されるのである。このように、アーレントにおいて、「出生」概念は人間存在の意味を開示する決定的な概念である。

### (3) 「奇蹟」としての唯一存在の出生

さて、人間の出生は、つねに一つの始まりであり、過去にも未来にも決して存在しない「唯一の存在」としての始まりである。もとより、アーレントにおいては、各人の唯一性は、孤立した独我存在としての唯一性ではない。「地球上に生き世界に住むのが一人の人間ではなく、複数の人間である」という、人間存在の基本条件としての「複数性 (plurality)」を前提とする唯一性である<sup>(9)</sup>。各人の唯一性は、それぞれが独自の存在である複数の他者を前提とする唯一性である。それゆえにアーレントは「唯一性」概念を「複数存在の逆説的な唯一性 (the paradoxical plurality of unique beings)」<sup>(10)</sup>として捉えている。

しかもアーレントによれば、こうした唯一存在としてのはじまりは、「およそありえない奇蹟 (miracle)」である。これに関する彼女の説明を要約しよう。始まりとは、「すでに起こった事には期待できないような、なにか新しいことが起こること」である。だから、どんな始まりにも、どんな始原にも、人を驚かす「意外性」という性格がある。生命が非有機体から生まれたことも、地球が宇宙の過程から生じてきたことも、人間の生命が動物の生命から進化してきたことも、ほとんど奇蹟に近い。新しいことは、つねに奇蹟の様相を帯びる。むしろ、人間の出生も、一つの驚きであり、衝撃であり、奇蹟である<sup>(11)</sup>。

### (4) 愛から「尊敬」へ

さて、アーレントは人間の出生と密接に関係する「生殖」と「愛」についてどのように捉えているのであろうか。ここでは、愛に関するアーレントの見解についてのみ確認しよう<sup>(12)</sup>。愛は私的領域と深く関係する。アーレントによれば、私的領域とは、第一に、個体の生存と種の継続とに必要なものが保護され、保障される領域であり、第二に、「他人を見聞きすることを、あるいは、

他人から見聞きされることを奪われた (deprived)」という意味で、まさに私的領域 (realms of private) である。この領域は親しい者たちによる親密な領域であるが、他人との結びつきから分離され、他人との関係が奪われた閉鎖的な領域である。愛はこうした私的領域の性格をそのまま持っている。愛は当事者だけの親密な関係であり、愛の当事者は他人との関係から引きこもり、公的領域 (realms of public) から身を隠す。愛し合う二人にとってはいわば世界は消滅する。それゆえに、愛の特質はその閉鎖性にあり、「無世界性 (worldlessness)」にある。そして、愛は、その無世界性のゆえに、世界、とくに公的世界を破壊してしまう危険性をもっている。逆に、愛は公的領域の光に曝されるとき死滅するか、あるいは、欺瞞的な愛に変質してしまう<sup>(13)</sup>。

愛のこうした閉鎖的・排他的・無世界的な性格に対して、「尊敬 (respect)」は、「より広い人間事象の領域」に属するものであり、「私たちの間に世界が入り込んでくる空間を確保してくれる人への敬意 (regard)」である<sup>(14)</sup>。ただし、アーレントのいう尊敬は、相手が優れた特質をもっているとか、優れた功績をあげているかどうかとは関係がない。尊敬は、その人の「正体 (who)」つまりその人の「存在そのもの」への敬意である。尊敬とは、その人の存在そのものに対して敬意を払い、その存在を丸ごと承認し、肯定することである。アーレントは、あくまでも、自由で開かれた人間関係の樹立を願い、他者の存在そのものに対する敬意を求めているのである。

新しい始まりの出現は、夫婦間の愛の閉鎖的・排他的な性格を克服する契機となる。愛する当事者がその無世界性を克服するためには、なにか「介在者 (between)」の出現が必要である。そして、愛する者たち間の唯一の介在者は、子どもである。この介在者である子どもは「世界の代表」である。子どもの誕生は、愛する者たちの間に「新しい世界」を挿入する。しかし、そのときは、ある意味で愛の終わりでもある。だから、愛する者同士は、愛に替わる、互いの尊敬によって「新しい関係」を作らねばならないのである<sup>(15)</sup>。

### (5) アーレントの出生概念が示唆するもの

アーレントの出生概念は多くのことを示唆してくれる。ここでは、人間存在論的にみて、また人間形成論的にみ

て重要と思われる三つの示唆を取り出したい<sup>(16)</sup>。

### ① 唯一存在の始まりとしての出生

第一の示唆は、人間の出生は、「唯一存在としての始まり」であるというアーレントの思想である。だが、体外受精や代理出産などの生殖技術の開発によって出生をめぐる状況が一変しつつある今日、こうした主張は成立しうるであろうか。すでに述べたように、アーレントにおいて、人間存在の意味は個人が「出生」する度に繰り返し開示される、と捉えられているが、現在こうした見方は成り立つのであろうか。もし成立しないとすれば、われわれは人間存在の意味をどこに求めることができようか。人間の唯一性とか、個人の「かけがえのなさ」とか個人の「尊厳」といった言葉が意味をもつための思想的根拠をどこに見出すことができるだろうか。このような問いを立てるとき、アーレントの思想は、今日ますます重要性を増しているように見える。

### ② 出生を契機とする大人の新しい関係の構築の必要

第二の示唆は、出生は一人の人間の始まりであると同時に、その始まりの原因である一組の男女にとっても新しい始まりである、という重要な指摘である。これに関して、アーレントは、愛する者たちは、愛の代わりに、尊敬に基づく新しい関係を作ることが必要であることを教えてくれる。子どもの出生によって、夫婦は、そして、家族員もまた、これまでの関係と生き方の見直しが求められる、新しい関係を作ることが迫られる。ここに、われわれは、まったく無力な赤ん坊が、夫婦や家族の関係の見直しと、新しい関係の構築を迫るという人間形成論的連関を予想することができよう。

### ③ 新しい始まりとしての子どもへの責任

第三の示唆は、子どもは新しいことを始める能力、つまり何かを「創始する力」をもって生まれてくる、というアーレントの思想である。世界の老朽化を食い止め、世界を更新するために必要なものは、新しい始まりとしての子どものなかの新しく創始する力である。アーレントによれば、教育とは、子どもと世界の双方を保守する営みであるが、保守すべきは、単に子どもの生命だけでなく、子どものなかの創始の力であり、これを守り育てることが大人の基本的な責任である<sup>(17)</sup>。後に検討するように、ハンス・ヨナスもまた、乳飲み子に対する責任にあらゆる責任の原型を見ているが、アーレントにおい

ても、責任概念と出生概念とは深いつながりがあり、出生とともに携えてくる子どものなかの創始の力を守り、世界を老朽化から守ることが大人の責任である、と捉えられている。

以上、アーレントの出生概念についてのレビューから、人間存在論的に見て、また人間形成論的に見て重要だと思われる三つの示唆を取り出した。次節では、とくに第二及び第三の示唆に焦点づけて、「出生」をめぐる人間形成論的連関についての考察を試みる。

## 2 「出生」をめぐる人間形成論的連関

### (1) 妊娠と出産をめぐる母子の危機

アーレントによれば、人間の出生は、唯一存在の始まりであり、同時にまた、世界に「新しい始まり」が出現することを意味する。ところで、これまで存在しなかった何者かが突然出現することは、世界にとっては、アーレントが言うように、まさに奇蹟であり、驚きであり、かつ衝撃であろう。大げさに聞こえるかもしれないが、事実、妻のお腹に新しい命が宿り、月満ちて赤ん坊が出現することは、妻にとってはもちろん、夫にとっても、そして兄弟姉妹にとっても驚きと衝撃と動揺をもたらす出来事であるにちがいない。新しい生命の出現は、周囲の人々に衝撃と動揺を、総じていえば一つの「危機」をもたらさずにはおかない。そこでまず、新しい命の妊娠・出産が引き起こす危機について、妻／母親の側と胎児／乳児の側に分けて素描してみよう。

妊娠と出産は女性にとって、妻／母親にとって大きな心理的危機をもたらす。ジョアン・M. エリクソンは「新生児の力」(The Power of the Newborn, 1953)という論文のなかで、妊娠した女性のお腹にいる「生き物の圧倒的な力」について次のように描いている。

たとえ妻がずっと心から子どもが欲しがっていたとしても、初めて妊娠した女性を襲う絶望感(そしてまた、怒りの感情)を認めて欲しい。なぜならば、彼女はいまや、自分のなかに第二の意志をもっているのであり、その意志に、自分自身の声(意志)として従うしか選択の余地がないからである。もし最初の妊娠であれば、お腹のなかのこのまだ見たことのない、まだ形のはっきりしない、そして名前もない生き物は、妊婦に対して圧倒的な力を振るうことは、すべての女性に知られている。<sup>(18)</sup>

妊娠した女性のお腹のなかにいる「まだ見たことのない、まだはっきりしない、そして名前もない生き物 (creature)」は、妊婦のなかの「第二の意志 (second will)」として、妊婦の選択を許さない圧倒的な力を振るう。この生き物は、食事、衣服、行動など妊婦の生活万般を拘束する。また、この生き物は妊娠月数の経過にともなって妊婦の身体や重量の変化をもたらし、妊婦の生活と行動を制約する。さらに、夜昼の区別、仕事と遊びの区別を無効にし、妊婦の時間感覚をも変化させる<sup>(19)</sup>。

もちろん、新しい生命は、胎児のときだけ圧倒的な力を振るうのではない。むしろ、出産後の新生児の拘束は絶対的である。授乳、オムツの交換、衣服の調節、ムズカリ、夜鳴き等々、母親の生活と行動のすべては新しい命からくるさまざまな要求に全面的に拘束され、新生児によって母親は完全に支配されるのである。

妊娠した母体においては、新しい命である胎児が母体を滅ぼすか、あるいは、古い命である母体が胎児を滅ぼすか、といった熾烈な生存闘争が行われていると見ることもできよう。妊娠及び出産は、胎児にとってのみならず、母親にとっても、まさに、「生死」を賭けた出来事であるに違いない。

では、夫／父親についてはどうであろうか。子どもの妊娠及び出生がもたらす夫／父親の心理的危機についての研究は十分ではない。ここでは、再びジョアンに聴こう。彼女は次のように記している。「夫は、妻の妊娠を知って、多少怯える（しかし、それを口に出してはいけない）。彼は、嫉妬心を抱き、さらに悪いことには、それをまったく自覚しない。彼の妻は以前よりいっそう可愛くなり、いっそう神秘的に見える。しかし、彼はやがて、栄光の中心にいるのは自分ではないことに気づくようになる」<sup>(20)</sup>。妻の妊娠を知ったとき夫の反応は複雑である。ジョアンによれば、妻の妊娠を知った夫には、怯えや嫉妬の感情が起こり、やがて、夫は「自分は栄光の中心にいない」ことに気付くようになる。どうやら、父親は、妻の妊娠及び出産によって、一時的に部外者に追いやられるようだ。フロイト理論によれば、父親の登場は、もっと後のエディプス期である。

次に、新しい命である胎児及び乳児について考えてみよう。ハンス・ヨナスは、乳飲み子という存在がもっている要素について印象的にこう書いている。

乳飲み子には次の要素が一体として含まれる。すなわち、すでに存在していることの信任を求める暴力性、まだ存在していないことの持つ無力さ、あらゆる生物が持つ無条件の自己目的性、しかし、この目的に応える能力がまだ備わっていないこと、これらのことが一体として含まれる<sup>(21)</sup>。

ジョアンは、胎児の「圧倒的な力」について、また、妊婦における、「第二の意志」について語っていた。上の引用にあるように、乳飲み子についてはあるが、ヨナスも同様に、「すでに存在していることの信任」を求める「暴力性 (Gewalt)」について語っている。しかし、ヨナスは同時に、乳児の特徴として「まだ存在していないこと」の持つ「無力さ (Ohnmacht)」についても語っている。乳児は、そして、胎児もまた、暴力性と無力性の相反する二つの要素を持っている。新しい命は、自ら生きんとする圧倒的・暴力的な生命力と、しかしその一方で、自らの力では生きることのできない無力さとを併せ持っている。つまり、胎児及び乳児は、ヨナスの別の言葉で言えば、「存在と非存在とのあいだの宙吊り」<sup>(22)</sup>の存在、つまり、「生死」の狭間で宙吊りにされている存在である。これは、字義通り、まさに「危機」である。というのも、「危機」を意味する英語、*crisis* は「分かつ」という意味のギリシア語 *krinein* に由来し、その原義は「分かつこと」であり、危機は、終局的には「生」か「死」かの分岐を意味するからである<sup>(23)</sup>。乳飲み子は、まさに生死の分岐としての危機のただなかに置かれている。しかし、乳飲み子にはこの危機を自力で乗り越える術はまったくない。乳飲み子の生死は、完全に周囲の人々に握られているのである。

## (2) 新しい生命の要求に対する応答：責任の原型

乳飲み子は、そして、胎児もまた、存在と非存在との境界を生きる。そして、ここに大人のもっとも根源的な「責任」が発生する。ジョアンは次の重要な一節を記している。

ここには、残念ながら、われわれの中の幾人かは、死が迫っているときにしか学ばない、議論の余地のない責任を強固にし、それに活力を与える何かがある。もしまったく議論の余地のない一つの責任があるとすれば、それは赤ん坊の要求に対する母親の応答である。<sup>(24)</sup>

このように、ジョアンは、新しく生まれ出ようとする生命の「要求 (needs)」に対する「応答 (respond)」にこそ、「議論の余地のない責任 (quite undebatable responsibility)」があることを明言している。

先にアーレントの出生概念の検討から示唆されることの一つとして、責任概念と出生概念とは深いつながりがあると述べた。ここでは、アーレントの教育論について詳述できないが、彼女は、子どもに対する大人の責任について以下のように捉えている。子どもは、一方で、見知らぬ世界において新しく存在するのであり、他方で、子どもは、生成の過程に存在する。子どもは、たんに「生命」として生まれるのではなく、「かれが生まれる前から存在し、かれの死後も存続し、そして彼がその生活を送ることになる世界」との関係において新しい存在として生まれてくる。したがって、こうした子どもの二重性に対応して、大人には二重の教育責任が生じる。すなわち、子どもの「生命と発達」への責任と、「世界」への責任である<sup>(25)</sup>。アーレントはきっぱりと次のように言っている。「人間の親は、受胎と分娩によって子どもを生命へと呼びだしただけでなく、同時に、子どもを世界のうちに導き入れたのである。親は、子どもの生命と発達、及び世界の存続にたいする二つの責任を負う」<sup>(26)</sup>。

もっとも、アーレントは、子どもに対する責任と世界に対する責任のうち、どちらかといえば後者、つまり、世界に対する責任を重視している。彼女のエッセイ「教育の危機」の末尾の文章がそれをよく示している。少し長くなるが引用しよう。「教育は、われわれが世界を愛し世界への責任を引き受けるかどうか、さらに更新なしには、つまり若い者が到来せぬかぎり、破滅を運命づけられている世界を救うかどうかが決まる分岐点である。教育はまた、われわれが自分たちの子どもを愛し、かれらをわれわれの世界から追放して彼らの好き放題にさせたりせずに、あるいは何か新しいこと、われわれが予見しえないことを企てるチャンスをかれらの手から奪うことなく、むしろ、共通世界を新しくする使命への準備を前もってかれらにさせるかどうかを決める分岐点でもある」<sup>(27)</sup>。アーレントの中心的な関心は、「更新なしには、つまり若い者が到来せぬかぎり、破滅を運命づけられている世界を救う」ことにある。たしかに、すでに述べたように、子どもが出生とともに携えてくる「新しいこと

を始める力」を、上の引用中の言葉でいえば、「われわれが予見しえないことを企てるチャンス」を護り育てることは教育の重要な責任ではある。だが、それは、子どもが「共通世界を新しくする使命」を担っているからである。アーレントにおいて重要なことは「世界への愛 (Amor Mundi)」<sup>(28)</sup>であり、世界を愛し、世界への「責任」を引き受けることである。

一方、責任という原理 (das Prinzip Verantwortung) を提唱し、科学技術文明の時代における責任の倫理の必要性を訴えたハンス・ヨナスは、乳飲み子こそ責任の原初の対象であるという<sup>(29)</sup>。さて、ヨナスによれば、「責任」という概念には二つの「当為 (Sollen, ~べし)」が含まれている。第一の当為は「何かの存在当為 (Seinssollen, 何かがあるべし)」であり、第二の当為は「何者かの行為当為 (Tunsollen, 何者かがしかじかのことを為すべし)」である。このうち先行するのは第一の存在当為であり、何かが「存在すること」の「権利」と「要求」である。この存在権利・存在要求に応えるべしと命じられたとき、第二の何者かに対する行為当為が発生する。

ところで、そもそも「存在当為」という概念は成り立つのだろうか。つまり、存在に当為が含まれているのだろうか。ヨナスはこの問いに対して、「然り」と言う。彼は、存在には当為が含まれており、したがって、存在 (存在当為) から一つの当為 (行為当為) を命じる道徳的規則を導くこと、あるいはそれを証明すること (存在論的証明) は可能であると捉えている。しかし、現代の倫理学では、何らかの「ある」(所与としての存在であろうと、単に可能的な存在であろうと) から、ひとつの「べし」を導き出すことには否定的である。

しかし、ヨナスはこうした否定的見解に対抗できると考える。そのためには、「ある」が明白に「べし」と合致するような「模範的な存在 (ein ontisches Paradigma)」, 換言すれば、それ自体が「ただ単にある」と把握されることを許さない、そういった「模範的な存在」が求められねばならない。では、こうした模範となる存在とはなにか。それは、「赤ん坊 (das Neugeborene)」である。これに関してヨナスはこう記している。

乳飲み子を問題にすることで何が見えてくるか。これをさらに探ってみる必要がある。ここで提供される証拠は、他の諸々の証拠よりはるかに、乳飲み子の際立った特徴を、すなわち、存在のなかに当為が告示される在り方を、疑問の余地のない直接性において示す。乳飲み子は責任の対象として、経験的に最初の、かつ直感的にもっとも明らかな範例であるばかりか、内実の上でも最高に完全な範例であり、文字通りの意味で原型である。なぜ乳飲み子の在り方が原型になるかといえば、われわれは、乳飲み子を際立たせる特徴が、始まりつつある生命に固有な、自らの存在の所有と非所有 (Besitz und Nichtbesitz des Daseins) との独特な関係にあることを発見するからである。乳飲み子はこうした関係におかれているがゆえに、たとえ始まったばかりのものであれ、生命を誕生させた原因たるものは、乳飲み子の存続という義務を負わされるのである。この存続が、責任のほかならない内実である。<sup>(30)</sup>

赤ん坊こそ、「存在 (ある) のなかに当為 (べし) が告示される」在り方が疑問の余地のない直接性において示される事例である。「赤ん坊が息をしているだけで、否応なく、『世話をせよ』という一つの『べし』が周囲に向けられる」。しかし、この「世話すべし」の「呼び声 (Ruf)」は、周囲の者によって、なんの抵抗もなく受け入れられるとはかぎらない。この「べし」は当然抵抗を受けるし、これを無視することさえ可能である (世話の放棄、乳児遺棄)。他方、この「べし」は赤ん坊が訴える世話への「頼み (Bitte)」ではない。なぜならば、赤ん坊はまだ頼みをする能力をもっていないし、また、そもそも頼みには拘束性がないからである。同情、哀れみを持ち出しても見当違いである。愛ですら問題ではない。

赤ん坊が呼びかける「べし」は、赤ん坊自身の「存在の所有と非所有」、つまり「無力な存在が非存在へとむかって宙吊りになっている (ein Hängen hilflosen Seins über dem Nichtsein)」ものへの当為である。それゆえに、赤ん坊に対する責任は、新しい生命の「存在 (生)」と「非存在 (死)」とを「分ける」(これこそ、危機の本質である) 決定的な責任であり、それゆえに、この責任こそあらゆる責任の「原型 (Archetyp/ Prototyp aller Verantwortung)」と見なされるのである。その責任は、生命を誕生させた原因たる「存在の創始者」、つまり親に課される責任であり、その内実は、始まりつつある生命の生存への義務である<sup>(31)</sup>。

ジョアン M. エリクソンは、「まったく議論の余地のない一つの責任は、赤ん坊の要求に対する母親の応答である」と言っていた。アーレントもまた、「親は、子どもの生命と発達、及び、世界の存続にたいする二つの責任を負う」と語った。ヨナスは、責任の原型は「赤ん坊」に対する責任にあると言う。乳飲み子の生死をかけた、つねに切迫した要求に対する「応答 (verantworten)」こそ「責任 (Verantwortung)」の「原型」である。と同時に、それは、そこから他のすべての責任が生まれてくる「萌芽 (Keim)」でもある。

### (3) 危機を媒介とする「妊娠の事実の受け入れ」

妊娠 (と出産) という出来事は、母親にとっても赤ん坊にとっても、それぞれの生死がかかった出来事であり、双方にとって重大な危機である。妊娠を知った女性にとっては大きな衝撃であり、動揺と不安を引き起こし、ときには絶望に至らせるかもしれない。

危機的状况とは、すでに述べたように、二つの選択肢があり、何らかの「決定」を下すことが求められる状況を意味する。妊娠の事実を受け入れ、出産の選択をすること、これが第一の選択肢である。妊娠の事実を受け入れず、それを拒否することが第二の選択肢である。この場合の選択は、新しい命を死に追いやることになる。だが、これも一つの選択ではある。いずれにしても、ここに下される決定は、大きな不安と葛藤のただなかでの決定であり、同時に、自由な決定でもある。「妊娠という事実を受け入れる」ということは、年齢や家族の状況などさまざまな制約はあるしても、最終的には自分が下す決定による受け入れである。まずこれを確認しよう。

しかしその一方で、妊婦の不安や葛藤にまったく関係なく、「新しい生命」は母体のなかで確実に生動を始め、成長を開始する。先にジョアン M. エリクソンを参照して、母体のなかの「第二の意志」について述べた。この第二の意志は、まさに自ら生きんがために、容赦なく母体から必要な栄養分を吸収していく。吐き気や食欲不振などの症状を呈する「つわり」は妊婦にとって辛いことにはちがいないが、胎児は、母体がいくら苦しんでいようと食欲に栄養を奪い取っていく。

胎児の要求は容赦ない。しかし、妊娠した母体では次第に、この容赦のない胎児の要求に応えるメカニズムが、

妊婦の「意志を超えて」作動するようである。妊娠初期においては異質で横暴なものと感じられた「第二の意志」に「母体の意志」が呼応し、次第に二つが融和し、やがて一体化していくメカニズムがあるようである。もちろん「第二の意志」とか「母体の意志」といった表現は一つの比喩であって、その内実は胎児の、あるいは妊婦の「からだ」の要求を指している。いわば、胎児のからだと妊婦のからだとの身体的・生理的「共鳴関係」あるいは「呼応関係」が生まれるのであろう。

こうして、妊婦が素直に自らのからだの要求に従うとき、自ずから、胎児のからだの要求に応えることになり、そして次第に、出産へと妊婦のからだを整っていくことになるだろう。これについて永山美千子はこう述べている。つわりで食欲不振のとき、「…『食べなければ食べ、吐きたければ吐く…』といったように、母体の要求として受け止めていければよい。…このように母体の要求に従うことは、からだのなかの変化に敏感となり、出産へとからだを整えていく準備である」<sup>(32)</sup>。

上に参照した永山によれば、専門家にはよく知られていることだそうだが、出産後の赤ちゃんへの授乳行動にもこうした絶妙な身体的・生理的メカニズムが作動しているそうである。赤ちゃんの吸啜行動は母体にとって大きい意味がある。吸啜は母親の乳汁分泌機構にスイッチを入れ、また、吸啜はまた、母親のなかに出産したわが子の欲求に応えようとする心（母性）を引き出す。そして、これによって母親の心が安定し、産後の回復を早めるそうだ。

一方、吸啜は赤ちゃんにとっても意味が大きい。吸啜は、胎便の出をよくし、黄疸を少なくする。吸啜の回数が多くなると、乳汁分泌が増え、赤ちゃんは自らの力で食料を得ることができるようになる。吸啜行動はまた、赤ちゃんが母親を認識する第一歩であり、吸啜の繰り返しによって母親との絆が強くなっていく<sup>(33)</sup>。

以上、「妊娠の事実を受け入れる」ことの意味について考察してきた。この行為は二重の意味をもつ。妊娠の事実を受け入れるとは、一方で、自由な決定と選択による行為である。しかし同時に、他方で、妊娠の瞬間から、胎児においても母体においても誕生／出産に向けた身体的・生理的な機構が自動的に作動し始める。妊娠の事実を受け入れるとは、したがって、胎児と母体の双方の身

体的要求に従うことであり、いわば、双方の「身体の声」に傾聴し、それに委ねることであろう。ボルノーによれば、危機における自由な決断は、恣意的な決定ではなく、生の絶対的な行き詰まり状況における決断であり、一つの「必然」に促されての決断である<sup>(34)</sup>。われわれは、妊娠の事実を受け入れるという行為にも、こうした連関を見出すことができよう。

#### （４）赤ん坊と母親との相互応答・相互形成

妊娠の事実を受け入れることができるとき、女性は身体的・心理的に大きく変化することができる。これに関して、再び永山の言葉を引用しよう。「妊娠・出産という事実を受け入れることができた女性は、次第にからだに敏感になって、母親へと心身ともに成長していく。しかし、受け入れが不十分であっても、妊娠したからだは本人の意志に反してでも変化していくことも確かだ。たとえば、自分の生活がどんな状態であろうと、出産できるように自然は280日間の妊娠期間を準備しているからだ」<sup>(35)</sup>。妊娠した女性は、不安や心の葛藤を抱きながらも、意識的な決定によって、またその根底にある胎児と自分自身の身体の「声」に「応答」し、妊娠という事実を受け入れるとき、母親へと一歩前進することができるのである。

実際、胎児は、そして乳児も、一人の女性を母親に変え、そしていっそう成長させる力を秘めている。ジョアンは、胎児が母体に与える「活力 (vitality)」についてこう記している。「…妊娠した女性は、ある無比の仕方での新しい存在が自分と一体であることに気づくようになる。彼女の生命力 (life) が胎児の生命力を育む。そして、そのお返しとして、胎児の生命力が彼女の身体のすべての部分に、実際、身体的全メカニズムにより完全な活気を与える」<sup>(36)</sup>。ここには、胎児が母親に活力を与え、逆に今度は、母親が胎児に活力を与えるという活力の贈り合い、つまり、活力の相互賦活が鮮やかに描かれている。こうした活力の贈り合いは、もちろん、誕生後の赤ん坊と母親とのあいだでも行われる。エリック・H. エリクソンは、こうした相互贈与の原初的な形態が母子間の「微笑み (smile)」の交し合いのなかにあると言う。

赤ん坊の微笑みは、大人のなかに希望を吹き込み、大人を微笑ませる。そして逆に、そのお返しとして、自分に希望を与えてくれるよう大人を仕向ける。これは、もちろん、信頼できる経験を保障して欲しいという、大人に対する赤ん坊の願いをあらわすひとつの表情にすぎない。しかし、赤ん坊のこの表情は、信頼できる経験を保障してくれる者に対してひとつの強さを与え、その人のなかに赤ん坊にいつでも応答できる用意と必要な条件を目覚まし、それを経験の相互性を通して次第に強めていくのである<sup>(37)</sup>。

この文章には、微笑みの贈り合い・希望の相互贈与という形で生じる、赤ん坊と大人・母親とのあいだの相互応答が鮮やかに描かれている。赤ん坊の微笑みは、大人のなかにひとつの活力、すなわち「希望 (hope)」を吹き込む。逆に、そのお返しとして、自分にも希望を贈ってくれるよう仕向ける。赤ん坊と大人、とくに母親とのあいだの微笑みの交し合いには、生きるための最も基礎的な活力としての希望の贈り合いという重要な意味がある。

もちろん、こうした微笑みと希望の贈り合いが、まったく自然に、あるいは、予定調和的に起こると考えてはならないだろう。赤ん坊の側から見れば、この相互贈与の底には、痛切な赤ん坊の願い、あるいは訴えがある。エリクソンの言葉で言えば、「信頼できる経験を保障してほしい」という訴えである。

無力な赤ん坊は自力で生きることができない。母親や家族による全面的な庇護に頼るしかない。胎児のときは、食欲に母体から栄養を奪い取ることができた。しかしいまやそれはできない。赤ん坊には、母親や家族に対して自分の痛切な要求に応答するように訴え、しかも、実際に応答してもらえらる力を自ら育てることによってしか、生きる方法はない。ハンス・ヨナスは乳飲み子を「存在と非存在」、つまり生死の境界を生きる存在であると述べていた。赤ん坊の微笑みには強い生命力、つまり、生への要求、いわば生への意志が表れているのであろう。

赤ん坊の微笑みに応えること、そして希望を贈るということは、「生かしめよ」という赤ん坊の声に「応える (respond)」ことである。それは、ヨナスの言葉でいえば、「存在」の声を聞き届けることであり、ヨナスはここに「責任」の原型を見ていた。それは、一つの生命、一つの存在の「原因」として負う責任である。

大人がこうした責任を自覚し、赤ん坊の要求に真摯に応答するとき、赤ん坊は大きなパワーを発揮する。ジョ

アン M. エリクソンの言葉を引用しよう。「無力な新生児は、彼の家族に対して、まったく横暴などしか言いようのない一つの挑戦を突きつける。赤ん坊は、家族からコントロールされると同じほどに、家族をコントロールし、育てる。事実、われわれは次のように言うことができるよう。家族は、赤ん坊によって育てられることによって、赤ん坊を育てる、と」<sup>(38)</sup>。

まさに、ジョアンが言うように、赤ん坊は家族から育ててもらおうと同時に、家族を育てるのである。大人が赤ん坊の要求に応答するとき、赤ん坊は、母親を、やがては、父親を、そして家族を育て成長させる。妊娠と出産は、胎児／乳児にとっても、妊婦／母親にとっても、また家族にとっても重大な危機である。しかし、新しい生命の誕生は、大人がそれに誠実に応答するとき、大人自身の大きな成長をもたらすのである。

## む す び

本稿では、生涯にわたる包括的な人間形成論を構築する一環として、また、現在、高度生殖医療技術の開発によって生殖と出生をめぐる深刻な問題が起こっているとの認識のもとに、まず、アーレントにおける「出生」の人間存在論的な意味についてレビューし、次いで、これを踏まえて、「出生」をめぐる人間形成論的な連関について考察した。

一つの新しい生命の出現は、アーレントに即して言えば、世界のなかにまったく新しい始まりが出現することであり、世界にとって驚きと衝撃と動揺をもたらす出来事である。実際、女性の妊娠と出産は、妻／母親にとっても、新しい命にとっても、生死に関わる重大な危機である。

だが、妊娠と出産の危機からくる不安や葛藤を抱きつつも、妊娠の事実を受け入れ、また、生まれてきた乳飲み子の要求に応答し、それへの責任を引き受けるとき、大人は無力な赤ん坊によって活力が与えられ、妻は母親へと心身ともに成長していく。そして、やがては、夫もまた、父親へ向けて成長していくのであろう。まさに、「新しい生命」が家族から育てられると同時に、家族を育てるのである。われわれは、ここに、「出生」をめぐる人間形成論的連関、すなわち、妊娠及び出産をめぐる危機を媒介とする、妻／母親と胎児／乳児とのあいだの相互応答を軸とする相互形成の連関を見出すことができよう。

## 注

- (1) 筆者はかつて、共同研究のメンバーとして、生涯の終端、ライフサイクルの終点に焦点を当て、「老いと死」をめぐる人間形成論の構築を試みた。拙稿「老いの叡知」、岡田渥美編『老いと死—人間形成論的考察』、玉川大学出版部、1994年、293—318頁。また、拙稿「生殖の現状と人間の無意味化の進行—出生をめぐる教育公共性論構築のための序説」、愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 第49巻第1号、2002、1—12頁を参照されたい。
- (2) 拙稿「生殖の現状と人間の無意味化の進行」、前掲紀要。鷺田精一『悲鳴をあげる身体』、PHP新書、1998年。
- (3) 本田和子『子どもが忌避される時代』、新曜社、2007年、18—64頁他。
- (4) 拙稿「H. アーレントにおける『出生』の存在論的意味」、愛媛大学教育学部紀要、第53巻第1号、2006年、9—19頁。また、拙稿「アーレントの教育論—世界・可死性・出生・教育—」、愛媛大学教育学部 教育論集、第17号、2006年、3—19頁。
- (5) Hannah Arendt; *The Human Condition; second edition*, The University of Chicago Press, Chicago, 1998, p.177. 以下、引用の際のこのテキスト名はHCと表記する。志水速雄訳『人間の条件』、ちくま学芸文庫、1994年、0286—7頁。以下、この訳書からの引用も併記する。なお、訳書からの引用の際は書名を省略する。
- (6) 拙稿「H. アーレントにおける『出生』の存在論的意味」、前掲紀要。
- (7) 「自由」とは、文字通り、「自ら」に「由る」ことであり、行為の原因が自己自身の内にあり、しかも、「自由」に何かを為すことは、「始めて」何かを為すこと、つまり、「創始する」ことである。アーレントにおいては、このように、自由の原理と創始の原理との内実は同じである。
- (8) HC, p.177. 0288頁。アウグスティヌスのこの一節は、Loeb Classical LibraryのなかのAugustine, *City of Good (De civitate dei)*, vol.IV, Books, 21 (アーレントは20章としているが、21章の誤り)にある。
- (9) HC, p. 7, 020頁。なお、アーレントは人間の「基本的条件 (fundamental conditions) として、「生命それ自体 (life itself)」、「出生と可死性 (natality and mortality)」、「世界性 (worldliness)」、「複数性 (plurality)」、「地球 (the earth)」の五つを挙げている。HC, p. 9, 11, 021, 024頁。
- (10) HC, p.178. 287頁。拙稿「H. アーレントにおける『出生』の存在論的意味」、前掲紀要。
- (11) HC, 178. p.289—90. 同上拙稿。
- (12) 以下、「生殖」、「愛」、「尊敬」についての詳細は、拙稿「アーレントにおける『出生』の存在論的意味」、前掲紀要を参照。アーレントによれば、生殖(繁殖)は「種の生存を保障するための生命の再生産」であり、生命過程の維持に関する行為である。たしかに人間もまた、生物の一種である限り、生殖がなければ種の維持は不可能である、しかし、生殖行為自体にはそれ以上の意味はない。問われるべきは、人間存在の意味にかかわる「出生」である。生殖は、固有の生涯の「始まり」としての「出生」とは原理的に区別されるのである。
- (13) HC, p.242, 379頁。
- (14) *ibid.*, 379頁。
- (15) *ibid.*, 379頁。
- (16) 以下に掲げる三つの示唆は、すでに拙稿「アーレントにおける『出生』の存在論的意味」、前掲紀要で述べたものの再確認である。
- (17) Hannah Arendt, *The Crisis in Education, Between Past and Future*, Penguinbooks, 1977, pp.185—6. H. アーレント『過去と未来の間』、前掲書、250頁。また、拙稿「アーレントの教育論—世界・可死性・出生・教育—」、前掲論文。
- (18) Joan M. Erikson; *The Power of the Newborn*, 1953. Erik H. Erikson (ed. Stephen Schlein), *A Way of Looking at Things: Selected Papers from 1930 to 1980*, W.W. Norton & Company, 1987. p.569.
- (19) *ibid.*, p.570.
- (20) *ibid.*, p.571.
- (21) Hans Jonas; *Das Prinzip Verantwortung*, 1979, Suhrkamp Verlag, S.240. ハンス・ヨナス、加藤尚武訳『責任という原理』、東信堂、2000年、228頁。なお、引用に際しては、書名を略して、この訳書の頁も併記する。ただし、適宜、訳を変えたところがある。
- (22) *ibid.* S.240, 228頁。
- (23) O.F. Bollnow; *Existenzphilosophie und Pädagogik*; W.Kohlhammer, 1959, 6. Aufl., SS.24. ボルノー、峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』、理想社、1996年、33頁以下。
- (24) Joan M. Erikson; *op. cit.*, p.570.
- (25) H. Arndt, *The Crisis in Education*, *op. cit.*, pp.185—6. H. アーレント『過去と未来の間』、前掲訳書、249—250頁。拙稿「アーレントの教育論—世界・可死性・出生・教育—」、前掲紀要。
- (26) *ibid.*, pp.185—6. 同上訳書、249—250頁。
- (27) *ibid.*, p.192, 同上訳書、259頁。
- (28) エリザベス・ヤング=ブルーエルは、その浩瀚なアーレント伝において、「世界への愛」についてこう書いている。「彼女(アーレント)の活動の主題の最終的な変奏曲は、『精神の生活』のなかで、〈思考活動〉、〈意志活動〉、〈判断活動〉と題された諸章で演奏された。人間の数多性(本稿では複数性と訳している。)の第二の様式すなわち自己自身との共存を論ずるなかで、アーレントの政治的思考のはじめと終わりが一つであり同一のものであることが明らかにされた。彼女の思考を一つのものにしていったのは、自己と他者を一つに結びつける愛だと彼女が理解するにいたった愛—すなわち世界への愛であった。」エリザベス・ヤング=ブルーエル、荒川幾男他訳『ハンナ・アーレント伝』、晶文社、1999年、436頁。
- (29) 以下、ヨナスの責任論に関する考察は、H. Jonas; *op.cit.*, SS.234—242, 前掲訳書、221—230頁に基づいている。
- (30) *ibid.*, S.236, 同上訳書224頁。
- (31) ヨナスによれば、この根源的な責任は親だけのものではなく、自らに生きることを許しているすべての人の責任である。なぜならば、すべての人はある創始者(自分の父と母)によって存在を与えられたのであるからである。したがって、存在の創始に参画するのは親だけでなく、人間全体である。
- (32) 永山美千子「からだはどのように整えられ、どのように変わるか」、吉村典子編集『出産前後の環境』(講座 人間と環境 第5巻)、昭和堂、1999年、55—6頁。
- (33) 同書、66—7頁。
- (34) O.F. Bollnow; *op. cit.*, SS.36. 前掲訳書、33頁以下。
- (35) 永山美千子、前掲書、56頁。
- (36) Joan M. Erikson; *op. cit.*, p.570.
- (37) Erik H. Erikson; *Insight and Responsibility*, 1964, W.W. Norton & Company, p.116.
- (38) Joan M. Erikson; *op. cit.*, p.569.